

口径約 4.8 cm, 底径 5 cm, 高さ 12 cm、

頸部径は 4.6 cm, 胴部最大径は 9.2 cm

2

## 研究ノート

### 岩手県野田村の弥生小型壺と北海道江別市の続縄文小型壺

#### 2.1 はじめに

筆者は 2016<sup>①</sup>17 年、公益財団法人岩手県文化振興財団埋蔵文化財センター（以下、岩埋文）に所属し、2016 年に岩手県野田村上代川遺跡（岩手埋文 2020）の発掘調査に携わった。遺跡は中世の製鉄遺構が主体だが、弥生中期<sup>②</sup>後期を主に弥生土器も出土する（同 p.168<sup>③</sup>173）。その中に小型壺（図 2<sup>④</sup>同 p.200-59）があった。そして、これに類した壺が北海道江別市旧豊平川河畔遺跡（図 3 江別市 1983 p.18-6・石川 2005 P.19-2）にあった。岩手県野田村と江別市の間に位置する道南で活動する<sup>⑤</sup>南北海道考古学情報交換会誌に紹介し、皆様から御教示を頂く<sup>⑥</sup>こととした。

#### 2.2 野田村上代川遺跡の小型壺

竪穴住居 SI06 埋土出土。この埋土は弥生中期後半・川岸場式を主として後期・赤穴式までの土器が出土する。小型壺は頸部に穿孔が一か所ある。その頸部には横走沈線が巡る。無紋地に二本一組の沈線で器表面のほぼ全面に施文する。肩と底部際には鋸歯状文が巡る。底部は上げ底気味、器壁厚さは比較的一定で、口唇断面

形状はすぼまる。胴部は弧状の沈線が方形区画内に収まった文様が横に連続する構成である。時期は、遺跡報告書の分類記号（岩埋文 2020 p.167）で V 群 3 類 A（本文：同 p.162<sup>⑦</sup>163、図：同 p.169<sup>\*1</sup>）である。V 群 3 類とは、弥生中葉は川岸場式の頃、A は恵山式や田舎館式といった、より北からの影響を持つ土器群を指す。大きさは、口径×頸部径×胴部最大径×底径×高さで示すと、約 4.8×4.6×9.2×5×12cm。

#### 2.3 江別市旧豊平川河畔遺跡の小型壺

遺跡は旧豊平川（世田豊平川）を見下ろす台地の縁にあり、江別チャシもここである。壺は墓 18 から出土した。図 3 に示した。3 a は再実測と拓本（石川 2005）、図 3 b は当初の報告図（江別市 1983）である。図 2 で示したものと同様、頸部の一か所に二個一組の穿孔がある。頸部には横走沈線が巡るが穿孔部分より上、口唇際は無紋<sup>⑧</sup>となる。縄文地に三本一組の沈線で施文<sup>⑨</sup>し、肩部に鋸歯状文が巡る。底部は上げ底気味で、器壁厚さは比較的一定、口唇断面形状はすぼまる。胴部は弧線文が横方向へ並ぶ。うろこ状に

\*1 掲載表（岩埋文 2020 p.371）の V 群 4 類は誤り

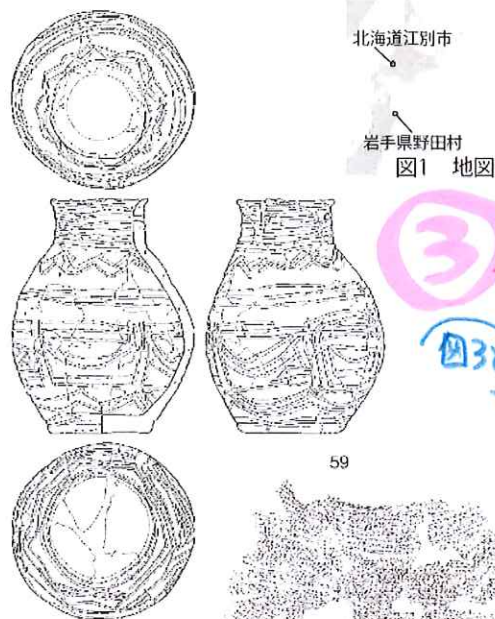


図2 岩手県野田村  
上城川遺跡出土の壺  
縮尺三分の一

近いが一部は不規則である。胴部下・底部際は沈線文が無く縄文のみである。大きさを口径×頸部×胴部最大径×底径×高さで示すと  $4.2 \times 3.8 \times 9.8 \times 4.6 \times 13.6\text{cm}$  である。

上代川遺跡出土のものと比較すると、高さに比べて横幅が若干狭く全体的に細めである。また無紋に対して縄文地紋である。無紋帯が頸部から口唇にかけて巡り、底部際も地紋のみである。形状は器壁の厚みが一定で、あけ底ぎみの底部と口唇断面の形状に類似点がある。二本と三本の違いはあるが複数本の沈線で施文する点と、頸部に一単位の穿孔部がある事が挙げられる。

## 2.4 壺の時期

墓 18 出土土器の時期を考察する。豊平川河畔遺跡墓 18 出土土器 (図 4-1③) は、そこから南西に約 400 m 離れた元江別 1 遺跡墓 19 出土土器に似る。墓 19 出土 14 個体の復元土器には二本ないし三本一組の沈線施文を持つ個体が目

立つ (大泰司 2021p.11)。

豊平川河畔遺跡墓 18 (図 4) と元江別 1 遺跡墓 19 (図 5) の出土土器群を比較すると、墓 18 図 4-1 は縄文地紋で胴部最大径部分の横走沈線が、墓 19 図 5-3⑬ と似る。今回の小型壺図 4-2 は一単位の穿孔と胴部文様構成、口唇際の無紋帯と底部際が縄文地紋のみで沈線文が無い点が図 5-6⑩ に似る。図 4-7 は頸部の幅広い無紋帯があり、その上下に横走沈線が施され、帯の下に刺突列が横方向に並ぶ点、そして、口唇部に短い縦方向の短沈線が横方向に連続して並ぶ点、そして器形が図 5-11 と似ている。両群は時期的に近いと考える。両群を様似町冬島遺跡出土土器の検討 (大泰司 2021p.15) で作成した表 1 のどこに位置するか考えると、網掛けで示した時期の頃であり、結果、川岸場式並行の可能性が高く、上代川遺跡の小型壺と豊平川河畔遺跡の小型壺は近い時期の土器と考えた。上代川遺跡出土弥生土器は川岸場式の頃を V 群 3 類として、そのうち文様要素から、田舎館式ひいては恵山式の影響が考えられるものを A とした事は 2 項で触れたが。まとまりは三つあり、残り二つのうち B は北上川沿いの土器型式・川岸場式、C は馬淵川・新井田川流域・八戸市域ないし野田村の在地的な特徴を持つ土器 (岩埋文 2020p.167) である。

A とした今回の小型壺が江別市の小型壺と「類同」とまではいかないが、類似点があった事を記した。今後も検討を続けたい。

江別市元江別 1 遺跡墓 19 出土土器と、様似町冬島遺跡出土土器に類似点があったという内容の文章 (大泰司 2021 p.10⑪) を今回、引用した。この様似町と野田村とは人の行き来が盛んで、1998 年に友好村町を締結した。この人々の動きは、流れの強い津軽暖流を避けた結果なのであろうか。

上代川遺跡では北田勲氏の采配の元、作業に

出土品



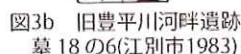



図3 a 旧豊平川河畔遺跡  
墓 18 の6(石川2005第4図の2で再度図化)

図3 a bは  
縮尺三分の一

図4 旧豊平川河畔遺跡 墓18の土器  
図4-2が墓18-6と同じである

墓 19 墓壇底部東壁際



墓 19 墓壇上部

図5 元江別1遺跡 墓 19の土器  
アヨロIIb式・軽川式・宇津内IIa式に相当あるいは類する  
(大森司2021図5を一部改変)

図5 元江別1遺跡 墓19の土器  
アヨロIIb式・軽川式・宇津内IIa式に相当あるいは類する  
(大森司2021図5を一部改変)

表1 時期考察表(大泰司2021冬島遺跡関連編年表を援用)

[illegible]

没頭できました。土器整理は石川日出志先生のお力で乗り切る事が出来ました。江別市では佐藤一志氏に便宜を図っていただいております。記して感謝いたします。

2005 石川日出志『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年』

2020 公益財団法人岩手県文化振興財団埋蔵文化財  
センター『上代川遺跡発掘調査報告書』  
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 713  
集

1983 江別市教育委員会『町村農場 1・七丁目沢 7・

日豊平川河畔—江別チャーシー・後藤・大麻 3』江別市  
文化財調査報告書ⅩⅦ

1981 江別市教育委員会『元江別遺跡群 後藤遺跡  
旧豊平川河畔遺跡 元江別 1 遺跡 元江別 2 遺跡  
元江別 5 遺跡 元江別 10 遺跡 元江別 11 遺跡』  
江別市文化財調査報告書ⅩⅢ

2021 大泰司統「冬島遺跡の特徴的な土器」『様似  
郷土館紀要 3号』

大泰司 統(公財)北海道埋蔵文化財センター)

また、佐藤 由紀男姓、大坂 招氏が御助言いたされた。